

はじめに

今日、新聞やメディアで外交について語られない日はない。わが国の外交政策はどうあるべきかとか、各国の外交関係はどうなっているのかなど、様々な議論や報道がなされているが、その奥で繰り返り広げられている外交という営みの内実については、あまり語られることはない。

外交の失敗は、最悪の場合、戦争になる。

そう言うのと仰々しく聞こえるが、そこまで行かずとも、外交の成否は国益に大きな影響を及ぼす。そのため外交は、国民の大きな関心事であるし、それに応えて、新聞やメディアは、大見出しで外交政策を論じ、外交関係を報じる。

その割には、現実の国際社会における外交活動の実態が、一般にはあまり知られていないのは、外交に特有の秘密性によるところが大きいかもしれない。実際、外交交渉は非公開で行われるし、外交官は任国の秘密を探ろうとする。その意味で、外交の内実が広く知られることは、外交活動の妨げになるという考え方もあるのだろう。

また、外交官という職業が、どこか雲の上の存在であるかのように思われているところにも原因があるのかもしれない。外務省という役所も敷居が高く、国民の身近に感じられることが少ない。

それやこれやで結局、外交とは何か、外交官や外務省は何をしているのか、という疑問は、大きなクエスチョンマーク付きのままというのが実状であろう。

本書は、そうした素朴な疑問に答え、外交活動の実態はもとより、外交の果たしている機能と役割から課題に至るまで、外交とは何かということを明らかにすることを目的としている。

そもそも、外交にはどういう意義があるのか。グローバルゼーションの進んだ現代国際社会において、主権国家の存在を前提とした外交は、どのような機能を果たしているのだろうか。

外交の舞台となる交渉や国際会議は、どのようなもので、誰が、どのようにして行っているのだろうか。

外交政策は、どのようなもので、誰が、どのようにして決めているのだろうか。

外交に内政はどのように関わっているのだろうか。

外交に不可欠な情報収集は、どのように行われているのだろうか。

外交と軍事との関係は、どうなっているのだろうか。

外交における文化の重要性は、どのように捉えられているのだろうか。

そして、外務省や外交官は、どういう仕組みの中で、どういう仕事をしているのだろうか。

これらの疑問に対し、本書では、国際関係論や国際政治学の理論を応用しながら、また、筆者自身の約三〇年に及ぶ外交官としての経験に基づいて得られた知見を適用しながら（そのため日本外交の事例を取り上げることが多い）、できるだけわかりやすく、コンパクトに解説することを目指す。そ

れに際し、ソフトパワーやパブリック・ディプロマシーなどの比較的新しい概念や、最近の事例なども取り上げる。また、**海外交アラカルト**というトピックスを設け、外交にまつわるエピソードやこぼれ話もいくつか紹介する。

外交の失敗を起こさせないようにするには、外交を一握りの政治家や外交官に任せっぱなしにするのではなく、広く国民が外交に関心を持ち、監視を怠らないことが肝要である。そのためには、外交に対する正しい知識と的確な問題意識を持つことが欠かせない。本書がその一助となれば幸いである。